

熊本豪雨から半年

九州を中心に甚大な被害をもたらした2020年7月の豪雨は4日で発生から半年。死者が65人に上る熊本県では同年末現在、計4215人が仮設住宅で暮らす。蒲島郁夫知事は球磨川の氾濫を受け、支流・川辺川でのダム建設を容認。国などは20年度中に治水の具体策を策定する方針だ。

仮設入居者 4000人超す

県によると、市町村が設けた避難所には最大で約二千五百人が身を寄せていたが、二十五人(二〇年末現在)にまで減った。建設型の仮設住宅は人吉市や球磨村などで十二月上旬、全八百八戸が完成。賃貸住宅を公費で借りた「みなし仮設」や公営住宅を合わせた入居者は四千二百十五人に上り、被災したままの自宅を暮らす「在宅避難者」も多い。県などは今後、災害公営住宅建設の検討を含め、被災者の恒久的な住居確保を本格化させる。

「ダムによらない治水」を掲げてきた蒲島知事は二〇年十一月、治水策を大幅に転換。環境負荷が少ないとされる「流水型」ダムの建設を国に要望した。清流保全を求める意見も多く、流域住民間の合意形成が課題として残っている。

豪雨では、球磨川沿いにある球磨村の特別養護老人ホーム「千寿園」で入居者十四人が犠牲になった。国は高齢者が迅速に避難できるよう対策を検討中だ。共同通信のまとめでは、九州の死者は計七十七人。熊本で依然一人が行方不明となっている。

球磨川のマス 再起の象徴に



「球磨川大鱒」を手にする齋藤寛さん＝昨年12月、熊本県球磨村で

被害の養魚場、ダム計画懸念

自慢の「球磨川」ブランドを全国へ。球磨村の二勝地やまめ養魚場は、ニジマスの大型改良品種を「球磨川大鱒」として売り出すべく、ブランド化を進めていた。だが昨夏の豪雨で被災し、多くの成魚を失った。代表で、宇都宮市から移住した齋藤寛さん(六三)は「村復興のシンボルにしたい」と事業の再起を誓うが、川辺川でのダム建

設計画が心に影を落としていく。二勝地やまめ養魚場は、齋藤さんはアユ釣りが趣味で、九月末までに設備を修復。十二月には県外の業者から約二万五千匹分の卵を新たに仕入れ、事業を再開した。現在は個別の要望に応じて販売し、二二年六月からはインターネットで全国販売するのが目標だ。気掛かりなのは、国や県が進める川辺川でのダム建設計画。環境負荷が少ないとされる「流水型」となる見通しだが「地元の財産である清流が保てないのではなか」と懸念する。行政側には建設反対を訴えているという。「球磨川の清流こそがマスのブランドイメージにしたい」。齋藤さんは不安を拭い去れない。

「違いを出したい」と、マスをブランド化して売り出すことを思い付いたという。

ニジマスと病気に強い別種を交配させ、茶粉末を混ぜた独自の餌を与えている。「球磨川水系から、きれいな水を引ける環境も、優れたマスが育つ要素の一つ」と齋藤さん。出荷時には全長四〇センチ、重さ八〇〇グラム以上に達し、脂がのった柔らかい赤身が特徴だ。ところが二〇年七月二十二日の販売に向けて準備を進めていた矢先、豪雨が襲った。川から養魚場までの水路が土砂で埋まるなどし、出荷間近だった成魚千匹の約七割が死んだ。村の観光施設も被災し売り先がなくなった。

齋藤さんは仲間力を借り、九月末までに設備を修復。十二月には県外の業者から約二万五千匹分の卵を新たに仕入れ、事業を再開した。現在は個別の要望に応じて販売し、二二年六月からはインターネットで全国販売するのが目標だ。